

[個別論文]

あるブラジル国籍男子生徒のライフヒストリー

—「グローバルな進路形成」に向けて—

山崎 香織*・今津 孝次郎**

- | | |
|----------|-----------------------------|
| 1. 課題設定 | 3. マリオのライフヒストリー |
| 2. 分析枠組み | 4. まとめと考察—「グローバルな進路形成」に向けて— |

1. 課題設定

近年、ニューカマー集住地域では日本の中学校を卒業したニューカマー生徒の高校進学率が上昇している。「外国人集住都市豊田会議」(2003年10月29日)の報告によると(外国人集住都市会議2004)、中学校を卒業したニューカマー生徒が30人を超える都市での外国人生徒の高校進学率は、群馬県太田市で66.7%、静岡県浜松市で68.9%、三重県四日市市で75.0%、愛知県豊橋市で55.0%となっている(2003年3月末調査)。そしてこれらの都市の中でも、ニューカマー生徒の卒業生数が最も多かった静岡県浜松市のニューカマー生徒の高校進学率は、2000年度で49.0%、2001年度で63.0%、2002年度で66.1%、2003年度で68.9%と上昇している。日本の中学校を卒業したニューカマー生徒の高校進学率は、日本人生徒の高校進学率と比較するとまだ低いものの、ニューカマー生徒の高校進学率の増加はニューカマー集住地域の高校にニューカマー高校生が確実に増加していることを裏付けている。もはやニューカマー集住地域の高校にニューカマー生徒が進学することは珍しいことではなくなっているのである。

そしてこのようなニューカマー集住地域の実状を背景に、近年ではニューカマー児童生徒教育に関する研究でも、今まで調査対象として扱うことのなかったニューカマー高校生を取り上げる研究が増えつつある。これらの研究の多くは、日本の高校に進学したニューカマー生徒の進路意識に注目する。例えば広崎(2007)は公立高校での調査を通し、ニューカマー高校生が高校教師やボランティアの教育支援を通して、大学進学に代表される高い学業達成に向けた進路意識を形成することを明らかにしている。また鍛冶(2007)は統計調査を通し、ニューカマー生徒の一部が高校進学拒否や高校中退という進路を選択する社会的要因として、ニューカマー生徒の両親の母国での社会的地位の低さとニューカマー生徒自身のエスニックグループとの繋がりの薄さを取り上げる。一方、

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程学生

** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

山崎(2006)はインタビュー調査を行ったニューカマー高校生の進路意識を分類することで、ニューカマー高校生の進路意識が国籍や出身高校に関わらず多様化していることを指摘する。

このように、これまでのニューカマー高校生の進路意識に注目した研究では、ニューカマー高校生の進路意識を規定する特定の社会的要因は何であるかを解明することに問題関心が置かれてきた。それゆえ先行研究では、それぞれのニューカマー高校生が進路意識を形成していく上でなぜ特定の社会的要因の影響を受けるに至ったのか、そして進路形成の詳細な過程を検討するまでには到らなかった。そこで本論文では、ニューカマー高校生個人の事例に注目し、生徒個人の進路形成に関する動的な過程を描くことを目的とする。具体的には、まずニューカマー高校生個人が母国と日本の両方の生活を通して、どのような集団ならびにそれぞれの集団の持つ価値規範に接触する機会を持っていたのかを明らかにする。そして、ニューカマー高校生個人が、生徒自身の出会った様々な集団の中から特にどのような集団の価値規範を重視し、進路形成の拠り所としていったのかを検討する。さらに、特定の集団の価値規範を重視することに対するニューカマー高校生の迷いや、ニューカマー高校生が特定の集団の価値規範を選択することによって生じる問題にも注目する。

ニューカマー高校生個人の進路形成の詳細な過程を検討することは、従来のニューカマー児童生徒教育に関する研究では指摘されることのなかったニューカマー児童生徒の進路形成に関する様々な選択肢を発見することに繋がる。本論文では、従来の研究のようにニューカマー高校生の進路意識を決定付ける特定の社会的要因を発見することではなく、生徒個人の事例から明らかになるニューカマー生徒の動的な生活史が、ニューカマー高校生の進路形成に関するどのような現実を物語っているのかを検討することを目指す。

2. 分析枠組み

(1) ライフヒストリーの作成

高校生個人の進路形成の動的な過程を描く有効な手段として、ライフヒストリーの作成に注目したい。

日本の高校に進学した生徒の進路形成に関する研究では、近年、定時制高校の生徒やニューカマー高校生など、社会的に弱い立場に立たされている生徒(教育マイノリティの生徒)の進路形成の過程を描くことに問題関心が集まっている。これらの研究ではいずれもWallman(1996)の「編成資源」に注目し、万人に対して平等に与えられている「編成資源」を教育マイノリティ生徒が積極的に獲得することで、それまで将来に否定的だった進路意識を変えていく姿を描き出す。そして教育マイノリティの生徒が、生徒自身の力で社会的弱者というイメージから抜け出すことが出来る存在であることを明らかにする(城所・酒井 2006, 志水・中島等 2006)。

このように「編成資源」を用いて生徒の進路形成の過程を描くことは、進路形成に関する生徒の主体性を強調することを可能にする。しかし「編成資源」は万人に平等に与えられている資源の為、生徒が社会的弱者というイメージから抜け出せられるのかどうかは、生徒自身の「編成資源」獲得に向けた積極的な行動という内面的な要素にかかっている。それゆえ「編成資源」に注目した研究では、進路を形成していく上での生徒個人の社会的背景の違いを軽視してしまう。また、「編成資源」は誰でも自発的に獲得することのできる資源で、かつこの資源を獲得することによって人々の

生活や意識が変わることが前提となっている。それゆえ先行研究でも、生徒が「編成資源」を自発的に獲得してある特定の進路意識を形成する様子を描くことを重視する。しかしその結果、先行研究では、進路を形成していく上での生徒の迷いや葛藤、あるいは特定の進路の断念などに注目する視点が見落とされてしまっている。

以上のように、先行研究の検討を通して得られた課題を踏まえ、本論文ではニューカマー高校生個人の進路意識形成の動的な過程を描く有効な手段としてライフストーリーの作成に注目したい。ライフストーリーをどのように定義するのかが研究によって様々だが、ここではGoodson (1988)の立場を採用し⁽¹⁾、ある特定の個人の口述や日記などに、研究者が多角的な検討を加えることで個人の経験や生涯を再構成した作品をライフストーリーと定義しよう。すなわち「ライフストーリー」の作成では、分析対象者となる個人が主観的な立場から自身の経験や生涯を再構成した「ライフストーリー」に、研究者がその個人にかかわるあらゆる資料（統計資料、従来の研究結果、同僚や友人による口述資料、個人にかかわる公的な資料など）を用いて多角的な検討を加えることで、個人と社会の動的な関係を浮き彫りにしていくことを目指している。また、ライフストーリーの作成では、分析対象者となる個人が関わっている集団や文化に対する新たなイメージや、これらの集団や文化がかかえている新たな問題を発見することも目指している。

このようなライフストーリーを作成していく上での意義や目的は、生徒個人の事例から明らかになる新しいニューカマー生徒像が、ニューカマー高校生の進路形成に関するどのような現実を物語っているのかを検討する本論文の研究目的と重なる。そこで事例として、公立高校に進学したブラジル籍男子生徒に注目し、生徒から得られたインタビュー（ライフストーリー）に多角的検討を加えることによってライフストーリーを作成するなかで、ニューカマー高校生個人が進路意識を形成していく上での動的な過程を明らかにしていこう。

（２）調査対象者の決定

調査対象であるニューカマー高校生としてブラジル籍男子生徒のマリオを選択したのは、以下の四つの理由からである。なお、本論文での登場人物名はすべて仮名である。

第一に、マリオが「よき語り手」であったからである。川又（1999）は、分析対象者となる個人の中でも際立って優れた話者としての素質を持つ者を「よき語り手」と定義するが、そうした意味でマリオは「よき語り手」であった。彼は自分が人生を通してどのような経緯で進路を形成していったのかを積極的に語った。第二に、マリオのライフストーリーを聞く機会が複数回あったからである。マリオに関しては調査の機会に何度も恵まれたり、調査時間を長く取ったりすることができた。第三に、マリオの語り信頼関係の上で引き出されていたからである。マリオは友好的で、高校を卒業してからもメールや電話を通して連絡を取ったり実際に会って話をしたりすることが可能だった。彼は調査に対して協力的で、質問に積極的に答えてくれた。第四に、マリオに関する資料を多く入手できたからである。具体的には、マリオを担当した高校教師のインタビューやマリオに関わる高校時代の公式記録（学業成績・指導記録）が挙げられる。このようなマリオ個人に関する資料に加えて、従来のニューカマー生徒教育に関する研究やブラジル国内の教育にかかわる統計資料もライフストーリーを作成する上での参考資料とする。

3. マリオのライフヒストリー

(1) 生徒の概要

マリオは19歳(2003年12月調査時点)で、サンパウロ出身のブラジル籍男子生徒である。彼は2000年4月に初来日し、日本の公立中学校の3年生に編入した。中学校卒業直後、彼はA高校(全日制普通科)に外国人生徒特別枠で入学し、2004年3月に卒業した。高校卒業後、2004年4月に日本国内の私立4年制大学に進学し、大学生活を送っている。

マリオは両親と姉、弟の5人暮らしである。父は日系2世で、ブラジル国内の大学を卒業後に旅行関連の仕事に従事していた。ブラジル国内での不況を理由に、一家は2000年来日した。彼の父は日本の企業で正社員として働いている。マリオの父は幅広い人脈を持っており、日本国内では企業の日本人同僚、ブラジル人学校校長や日本の大学のブラジル人ポルトガル語講師、ブラジル本国では州知事と知り合いである。またマリオの父の日本人同僚の子弟の多くは日本の有名大学に通っており、後にも触れるが、マリオの父は日本の高校事情に関する情報を日本人同僚から手に入れている。このようにマリオの父は日本とブラジルの両方の社会で国籍に関わらず、高い社会的地位を持つ人たちとの関係を持っている。このようなマリオの父の社会的地位は、従来の研究(池上2001, 宮島2003)で報告されるような在日ニューカマー労働者(自動車産業や製造業などの下請け工場で働き、日本人とは殆ど接点を持たないイメージ)とは異なっている。

とはいえ、マリオの姉と弟は日本国内の工場で働いている。マリオの姉はブラジル国内の高校を卒業した後に家族と共に来日し、そのまま工場で働いている。また、マリオより3歳年下の弟は、来日直後から日本国内のブラジル人学校に入学し、ブラジル人学校の高等部を卒業した後に日本国内の工場で働いている。彼は日本で資金を貯めて、ブラジルもしくはオーストラリアの大学へ進学することを希望している。またマリオの弟は、大学への入学準備として、工場で働きながら英会話学校にも通っている。

このようにマリオは、在日ニューカマー労働者の子弟ではあるものの、従来の研究で報告されてきたようなニューカマー労働者とは少し異なる生活環境にいる。

(2) 進路形成の経緯

マリオが進路を形成していく過程は、主に四つの時期(1 来日前・2 日本の中学生生活・3 日本の高校生活・4 日本の大学生活)に区分することができる【表1】。そこで、それぞれの時期に応じてマリオのライフヒストリーを作成しよう。

表1 マリオの学校生活と進路形成

時期区分	年次	出来事	マリオの語り
1) 来日前	1985 1988	サンパウロで誕生 弟が生まれる	①自分の目的は大学進学だけっていつも思っていて、子どものときからずっとお父さんと大学について話していました。お父さんは大学のことをよく教えてくれて、大学に入ればいい仕事できるんだよ、って。 ②ブラジル人にとっては、大学が一番大切なことなんです。大学に入ればいい仕事ができるって考えるから、勉強が一番。だからブラジルでは17歳で高校に入ることは普通ですね。
2) 日本の 中学生活	2000. 4 (15歳) 2001. 1 2001. 3	家族と共に初来日 X県O市内の公立 中学3年生に編入 X県立A高校全日 制普通科に外国人 生徒特別選抜(日 本語・面接)で合 格 中学校卒業	①まずはお父さんと話して、P市にあるブラジル人学校か日本の普通の中学校に行くのかを決めました。私は日本語を話したかったから日本の中学校に決めました。違う文化を勉強したり違う人に会ったり、それが大事だと思いました。 ②中学には、一人、ペルー人の生徒がいました。でも、全然話してない。彼は、日本語が大丈夫だけど、僕の場合は全然できなくて。 ③いじめはありませんでした。あんまり話せなかったけどみんな優しくかったと思います。先生が一番優しくかった。授業中に分からないことは先生に分かんないよ、と言って。先生も、この言葉分かるか? って。 ④先生が、日本語が全然分かんないと他の高校には入れない、A高校しかない、ここだけ入ることができるって教えてくれました。僕と父だけで先生の話と一緒に聞きました。先生はA高校だけを勧めて、一回テストをやってその試験で語学をやるって。
3) 日本の 高校生活	2001. 4 2002. 4 2003. 7 2003. 12	X県立A高校全日 制普通科に入学/ 一般の日本人生徒 と共に授業を受け た後に外国人生徒 特別選抜で入学し た生徒の為の放課 後補講を受ける A高校の一般教養 コース(進学コー スではない)を選 択 大学進学に向けた 本格的な情報取 集・受験勉強の開 始 私立I学園大学コ ミュニケーション 学部へ推薦入試 (面接試験(90 分))で合格	①同じ年の子は日本人だったら話すんですけど、ブラジル人の友達はいないし、だいたい日本人。ブラジル人は自分の中学校、高校とあんまりいなかったから話さなかったんですよ。 ②頭髪とか服装、髪とか制服をきちんとしていて、いつも厳しい。初めてのときは奇妙だと思いました。でも僕が見るといい子とそうでない子がいて、いい子でない子はボタンしていない。だからいい子の方がいいから守りました。 ③高校の時はブラジルの大学に戻ろうって思いませんでした。お父さんはまだ3、4年は日本にいるからその間は日本の大学で勉強して、ブラジルに戻ったら、日本の大学で勉強したことを活かせばいいっていつも言っていました。先生もよく、大学ではもっと日本の文化について学べるとか、日本でどういう職業につけるとか、日本とブラジルの交流をする人になれ、みたいなことを言ってくれて。 ④入る高校に差があることは全然分らなかったけど、2年生くらいのときに友達と話して知りました。A高校だったら絶対就職だって。実際に大体の友達は卒業後に就職しました。でもこれについて気にすることはなかったですね。もしこの高校が大学進学に弱いならしょうがないって。僕は高校卒業したら大学に入りたいていつも考えていたから、高校が大学進学に強いかわ弱いかは僕にとって殆ど関係なかった。 ⑤お父さんと高校の差について話したときに、もしいい高校に入ったら自分で頑張らなかつたら大学に入ることが出来ないよ、だからそれは関係ないよ、って話してくれました。お父さんは日本の学校のシステムとかどういう高校が強いかわよく知っています。 ⑥I学園大学は高校の先生が教えてくれて興味を持ちました。大学には知り合いのポルトガル語のブラジル人の先生もいるんですけど、その先生はなに勉強したい?とか聞いてくれて。国際関係を勉強したいといたら、I学園大学には勉強したいことがあるよって言ってくれて。

4) 日本の大学生生活	2004. 4	私立I学園大学コミュニケーション学部へ入学 工場でアルバイトを始める	①大学の雰囲気はちょっと冷たいみたい。この大学は外国人留学生も3人くらいで、もし日本語分かんなかったら駄目って感じ。授業のサポートもないし。大学の友達もあまり助けてくれない。高校では問題があったときにすぐに日本語や英語で教えてくれて。大学の授業はたまに先生と話して助けてくれる。でも外国人サポートはないから難しい。
	2005. 7	大学卒業後にオーストラリアの大学院への進学を希望	②日本に住んでいるブラジル人が一番考えるのはお金？勉強のことはしなくていいってみんな考えているんですね。だから僕は日本に住むブラジル人とは考え方が違うんですね。自分の周りで会うのは大体労働者。その人たちと話をするとき、大学の話なんかするとちょっと恥ずかしい。もし、僕が大学生って知られたらその人たちには嫉妬がある。だからいつも何しているの？って聞かれると、学生で仕事やっているとって両方言う。大学生って言わない。
	2007. 10	進学希望先をアメリカへ変更	

1) 来日前（～2000）

来日前、マリオは小学生の頃から既に父親から大学進学必要性を教えられて大学へ進学することを目標としていた【表1-1）-①】。ブラジルの場合、当該年齢人口（18～24歳）の大学進学率は2004年時点で9%となっており（ニッケイ新聞ウェブサイト、2004年10月15日付）、Trow（1976訳書）のいうエリート段階の社会にあたる。すなわち、ブラジル社会で大学に進学することは専門的な知識を身に付けて社会をリードしていくための特権として位置づけられており、マリオも自分の父親と同様、エリートとして社会参加していくことの重要性を父親から伝達されて内面化していった。また、「ブラジル人にとって勉強が一番」という語り【表1-1）-②】にもあるように、マリオは家庭以外の場所でも勉強を重視する生活環境で育っている。実際のところ、ブラジル国内の当該年齢人口（15歳～17歳）の高校進学率は30%にも満たないことが報告されており（外務省2007）、17歳で高校へ進学することも、ブラジル国内では人種にかかわらず、限られた生活層の人たちの特権である。イシカワ（2005）は、高等教育を受ける日系人の比率は高いものの、最近が多様化が進んでいて、必ずしも日系人＝教育意識の高い層ではないと指摘する。しかしマリオは来日するまでこの限られた層のコミュニティの中で育っているために、勉強を重視することや大学進学を目指すことを当たり前のこととして受け止めて、母国での生活を送ってきた。

2) 日本の中学生生活（2000. 4～2001. 3）

①学校の選択

マリオは2000年4月に家族と共にX県O市に来日する。来日時、彼は日本の高校1年生にあたる15歳であった。この年齢時に来日するニューカマーの多くは就労目的で来日し、日本国内の学校に通学することを全く検討していないことが従来の研究では報告されるが（イシカワ 2005）、マリオの場合は全く逆であった。マリオは日本国内でも母国にいたときと変わらずに学業を優先することを当然のこととして受け止めており、父親との話し合いを通して日本の中学3年生に編入することを決定した【表1-2）-①】。このことは、マリオならびに彼の家族がいかに母国の社会の中で教育意識の高い層に属しているのかを裏付けている。また中学編入時、マリオはブラジルの教育制度上では中学校教育を既に終了し、年齢も日本人生徒よりも1歳年上であったが、O市教育委員会はマリオの事情を受け入れて公立中学校への編入を実現させた。市町村によっては学齢超過者を中学

校に受け入れられない場合も多いなかで(宮島 2005)、教育委員会が学齢超過者であるマリオを受け入れた背景には、O市がマリオの来日時(2000年)に、既に外国人施策の実施に積極的な姿勢を示していたことが挙げられる⁽²⁾。このようにマリオは日本の公立中学校への入学を拒否されることなく、日本の中学校へ編入した。

②日本人に囲まれた中学校生活

マリオの住むO市の外国人登録人口は多いものの、その多くはマリオとは異なる学区に集住している。それゆえマリオが編入した中学校にニューカマー生徒はほとんどいなかった。唯一、マリオの編入したクラスにペルー国籍の男子生徒が在籍していたが、マリオはこの生徒とほとんど交流を持たなかったと振り返る【表1-2】-②)。日本の小・中学校を対象とした従来の研究では、ニューカマー生徒同士が学校生活を通して集団を形成し、ニューカマー生徒独自の下位文化を形成することが報告される(児島 2001)。しかしマリオは日本語能力の違いを理由に、ペルー国籍の生徒に対して同じニューカマーとしての親近感を感じることがなかった。もちろん国籍の違いも大きいと考えるが、少なくともマリオは中学校時代に同じ中学校に通っている数少ないニューカマー生徒と交流を持とうとしなかった。それゆえマリオは日本人とのかかわりを中心とした中学校生活を送ることになった。

③日本の中学校生活への適応

マリオは日本の中学校に編入したばかりの頃、日本の中学校の規律に驚いている。彼は次のように語っている。

「中学は毎日のあいさつとか何回も何回も。おばあちゃんが日本人で、日本について知ってて大丈夫だと思っていたけど、ショックだった。でもちょっとしてから慣れたけど、掃除とかもやんなきゃいけないんだって。」

しかし、マリオは日本の中学校の習慣の違いに戸惑ったものの、中学校教師も日本人同級生も親切だったと振りかえる【表1-2】-③)。それゆえマリオは、日本の中学校生活に対して特に大きな問題を抱えることなく1年間を過ごした。

④中学校卒業後の進路の決定

マリオが入学した2001年度の高校入試より、X県ではちょうど県内四つの公立高校で外国人生徒特別入試選抜が実施されることが決定した。そこでマリオの中学校時代の教師は、在日3年以内の外国籍生徒という条件にあてはまるマリオに対し、この試験でないと日本の高校に進学することは難しいとマリオとマリオの父親に説明し、外国人生徒選抜実施校である隣のA高校への受験を勧めた【表1-2】-④)。そしてマリオ自身もA高校への受験をすぐに受け入れて、家で作文練習を行うようになった。マリオが言うには、中学校では特に受験に向けた特別な勉強は行わなかったそうである。また、試験で面接があることも試験当日になってA高校へ行って初めて知ったと語っている。

マリオは幸運にも外国人生徒選抜を通してA高校への合格を果たした。実際、外国籍の生徒が日本の高校を受験する際には、各中学校や日本語支援教室で作文や面接を中心とした特別指導が実施されることが多い(山崎 2005)。また、X県の高校の外国人生徒選抜は希望者全入の選抜ではなく、ある一定の日本語能力を満たした生徒のみを受け入れる選抜となっている。しかしマリオは中学校

側からの特別な支援がほとんどなくても結果的に合格を達成した。マリオが在日1年未満でA高校に合格した背景には、マリオが来日前に4ヶ月間、母国の日本語学校に通っていたことや、来日後の学校生活では母語を使用する機会がなくて日本語のみであったことなどが考えられるが、いずれにせよマリオは、日本の高校進学に対する挫折感や迷いを経験することなく、在日2年目の春にA高校の全日制普通科へ入学した。

3) 日本の高校時代 (2001.4～2004.3)

①日本人に囲まれた高校生活

マリオは2001年4月にX県立A高校の全日制普通科に入学した。A高校にはマリオと同様、外国人生徒選抜で入学したフィリピン籍女子生徒が一人同じクラスに在籍していた。しかし、マリオはこの生徒と特に仲間意識を深めたわけではなかった。マリオがこのように感じるのは、性別や国籍ならびに日本語能力の違いに加え、彼女が高校2年生の1学期に家庭の事情でA高校を中退してしまったことが挙げられる。それゆえマリオは、高校時代も日本人同級生とよくかかわっていたと振り返る【表1-3】-①。また、マリオの進学したA高校には、一般入試で入学するニューカマー生徒が毎年数人在籍しているのだが、マリオの入学した2001年度は一般入試で入学したニューカマー生徒が一人もいなかった〔マリオより一つ上の学年には3名(ブラジル籍2名、ペルー籍1名)、マリオより一つ下の学年には5名(ブラジル籍3名、ペルー籍2名)の一般入試で入学したニューカマー生徒が在籍している〕。それゆえマリオは中学校時代と同様、高校時代も日本人生徒に囲まれた学校生活を送った。さらにマリオは高校時代にアルバイトをしなかった為、生活の中心は学校と家庭で、学校外で同じ国籍の人たちに会う機会がほとんどであった。

②高校生活への適応

A高校は普通科高校でありながら生徒の約半数が就職をする就職校⁽³⁾の為、生徒の生活指導を徹底している。その指導は中学校以上の厳しさであったので、マリオは当初は高校の生活指導を奇妙に感じた。しかし、マリオはこの指導に反抗することなく学校の規則を従順に受け入れている【表1-3】-②。実際にマリオを担当してきた教師も、彼を手のかからない生徒だったと次のように評価している。

「彼は3年間一貫して安定したいいい子でしたね。友達づきあいはそんなに多いわけではなかったですが、一人でいても苦痛じゃないような感じで、手がかかんなかったです。規律とか規則もきちっと背を正して聞いていましたからね。本当に指導がしやすかったですよ。」(2003年12月)このように学校文化に従い、かつ人間関係で悩むことなく独自のペースで学校生活を送るマリオは、彼と接する機会の多かった教師側から見ても、特に大きな問題を抱えているようには見えなかったのである。

③安定した進路選択

マリオは高校進学時に既に日本の大学に進学する意思を固めていたと振り返る【表1-3】-③。マリオが日本国内の大学進学を希望していることは、マリオが高校2年生の時の次のような指導記録からもあきらかである。

「マリオは毎週末のように父親から進路についてどう考えているのかを聞かれているといい、

意識は相当高い。しかし4年制大学に進学したいと考えている以外は具体的には決めることが出来ていない様子。人に関わる仕事やポルトガル語、英語、日本語を使う仕事に就きたいと今は考えているとの事である。」(2002年6月14日 A高校マリオ指導記録)

この指導記録では、マリオが明確な進路を決めかねていることが記録されている。しかし実際のところ、マリオは母国にいたときから国連職員になるという夢を持っていて、この記録が書かれた後に国連職員になる夢を高校教師に告げたと語る。マリオは、教師が国連職員の情報など将来に関する様々な情報を提供してくれたと話している。このようにマリオは高校時代、教師や親から積極的に日本の大学へ進学することを勧められ、大学進学に対する意欲を増加させている。

④日本人生徒の下位文化との相違

マリオは大学進学という高校卒業後の進路について全く迷うことがなかったと語っているが、A高校に通う日本人同級生は就職校であるために、A高校から大学進学を実現することが困難だと考えていたと振り返る【表1-3】-④)。しかし、マリオはこのような現実をほとんど気にすることなく、進路を変更しようとはしなかった。このように高校間格差の現実を知ってもなお、マリオの将来目標が揺らぐことのなかった背景には、彼が大学進学という目標を小さい頃より内面化していることや、前述した教師の大学進学に対する積極的な姿勢に加え、父親の助言が挙げられる【表1-3】-⑤)。マリオの長い将来を見据えた父親の助言は、マリオが高校間格差という日本の学校の価値観に縛られることを防いでいる。

また、3年間の高校生活を通して見ると、マリオは学業成績をそれほど伸ばすことができなかった。具体的にマリオの全ての科目の成績の平均は、大学入試直前の高校3年生1学期時点で、2.7(5段階評価 全11科目)である。その中でも古文Ⅰと数学Ⅱは1で、情報と現代文(別問題)は2と、日本語に直接関係する科目の成績が低い。しかしマリオは、彼自身の日本語能力が不足しているから成績を伸ばすことが出来ないと解釈することにより、低い学業成績を受け入れている。

「(成績があまり上がらなかったことに対して)授業は日本語が難しいから、成績も難しくなってきたね。宿題とか見ると簡単だって思うけど。でもやっぱり、授業やテストは日本語が分からないから難しいなって。」

そして高校では、大学生活に向けて日本語能力を向上させることを重視している。このように進学先の高校の学業成績水準や高校内での学業成績は、日本人高校生の場合、彼らの進路意識に強い影響を与える社会的要因であることが報告されてきたが(門脇・陣内 1992)、マリオの場合は自分が日本人生徒とは異なる特別な状況にいると認識することによって、進学先の高校や学業成績をほとんど気にしていない。マリオは自分がニューカマー高校生だからこそ、日本人同級生の進路に関する価値観に流されずに大学進学を目指すことができたのである。

⑤大学進学先の決定

マリオは最終的に私立I学園大学のコミュニケーション学部をAO入試(選抜要領では60分の面接となっている)で受験することになった【表1-3】-⑥)。ポルトガル語教師からの入試情報はマリオの父親のネットワークを通して彼が独自に入手したが、マリオはこの情報を提供してもらうことによってI学園大学への進学意欲を高めている。また、具体的な大学進学先を決定していく過程の中で、マリオは本格的な受験勉強を学校と家庭で行っていたと振り返る。

「大学進学に向けての試験勉強は6ヶ月くらい勉強したね。家では勉強を大体1時間くらいやって。数学とか国語もよく勉強しました。」

しかしマリオはよく勉強したと振り返るものの、学校外での勉強時間数も1日1時間と、いわゆる日本の受験生と比較すると少ない⁽⁴⁾。マリオが高い進学意識を持ちながらも学習時間が短いのは、彼が日本人同級生も含めて高い進学意識を持つ生徒と接する生活環境にいなかったことが挙げられるが、このような受験勉強を経てマリオはI学園大学を受験した。I学園大学で面接試験を受けたところ、マリオは外国籍生徒の場合のみ特別に英語面接があることを初めて知ったが、日本語よりも英語の方が自分の思いを伝えることが出来たのでよかったと振り返る。

「大学の試験は面接だけ。外国人だから1時間は日本語で30分は英語で面接しました。でも本当に話したいことは日本語よりも英語のほうが話せたからよかったです。」

マリオは日常英会話に興味を持って英語の勉強を自主的に行っていたために、面接で対応できるだけの英語のコミュニケーション能力を所有していたのである。実際、マリオの英語の学業成績は高校3年生1学期時点で英語Ⅱが7、オーラルコミュニケーションが5、選択英語が8(10段階評価)と比較的高かった。そしてマリオは面接試験を無事に終えて、I学園大学に合格した。

4) 日本の大学時代(2004.4～)

①外国籍生徒支援のない環境

マリオは2004年4月にI学園大学に進学したものの、学内の外国籍生徒の支援体制の少なさを否定的に受け止めている【表1-4】-①)。大学進学後、マリオは来日以降初めて外国籍生徒としての特別な支援を受けずに日本人生徒と全く同じ基準の下で学校生活を送ることとなったが、彼は大学の授業等においても中学校や高校と同様、外国籍生徒としての特別な支援が必要だと感じている。

②ニューカマー労働者との出会い

マリオはI学園大学進学後、学費を稼ぐために工場でアルバイトをはじめることになった。その工場ではマリオは来日後初めて多くのブラジル国籍のニューカマー労働者と接する機会を持つようになるが、マリオは、彼らの将来に対する考え方が今まで出会ってきたブラジル人の考え方と異なっていると感じている。そして自分が日本の私立大学に通っていることが知れると、ニューカマー労働者の中でも日本で成功した裕福な層に見られて反感を買ってしまうので、自分の社会的地位を曖昧に説明していると話す【表1-4】-②)。第1節で指摘したように、ニューカマー集住地域の高校進学率は6割を超え、15歳以上のニューカマー生徒が日本の高校に通うことは珍しくなくなってきた。しかし国内外を問わず大学進学となると、彼らの大学進学率は高校進学率よりもさらに低くなる。すなわち、大学の入試難易度を問わず、日本の大学に進学することは在日ニューカマーにとって母国の大学に進学することと同じくらい、もしくは母国の大学に進学する以上に可能性の低い進路なのである。マリオは自分では意識してこなかったものの、ブラジル籍のニューカマー労働者から見ればあきらかに成功者である。それゆえマリオは、自分とは異なる進路を歩む彼らと適度な距離を保ちながらうまく関係を築こうとしている。

③未来に向けて

マリオの最終的な将来目標は国連職員になることだが、彼は大学卒業後に国外の大学院に進学す

ることを検討している。当初、マリオは高校時代にブラジル人学校の国際交流パーティで知り合ったオーストラリア人からの情報もあって、オーストラリアの大学院進学を検討していたが、2007年時点では、日本で学費を稼いだ後にアメリカのカリフォルニア州の大学で国際関係学と国際社会学を専攻することを希望している。彼は既に進学希望の大学院の教授にも直接学問に関する話を聞いており、進学意欲を高めている。マリオが実際にどのような進路を選択するのかはこれからであるが、彼は自分の将来目標を実現する最善策を、日本やブラジルなど特定の国家の価値規範に捉われずに見出そうとしている。

4. まとめと考察—「グローバルな進路形成」に向けて

本研究は、マリオのライフヒストリーを通し、彼の事例から明らかになる新しいニューカマー生徒像が、ニューカマー高校生の進路形成に関するどのような現実を物語っているのかを検討することを目的とした。マリオは特に以下の二点において、従来の研究で指摘されてきたニューカマー生徒とは異なっている。一つは、複数の国家に跨る幅広い社会的ネットワークの所有である。従来の研究では、南米系をはじめとするニューカマー労働者の多くは日本国内で独自の集団を形成し、その集団では学業よりも就労を優先する価値規範が形成されていることが報告されてきた(宮島 2002)。そしてニューカマー児童生徒もこの限られた集団の中で成長するために、学校での学習に価値を見出さないことが指摘されてきた。しかし本論文で取り上げたマリオの場合、彼は先行研究で指摘されてきたニューカマー生徒とは異なり、国内外問わず様々な集団と接する機会を持っている。具体的にマリオは、日本やブラジルだけに留まらず、オーストラリアやアメリカの高い教育意識を持つ人たちとの関係を持っている。そしてこのような複数の国家に跨る社会的ネットワークのおかげで、マリオは進路形成に関する様々な情報を国内外から獲得している。

二つ目は、特定の国家や集団の価値規範に流されることのない思考様式である。従来の研究では、南米系をはじめとするニューカマー児童生徒の多くが日本人生徒への同化を余儀なくされていることや、同化を拒んで学校生活から疎外されていることが報告されてきた(志水 2001)。言い換えると、先行研究では日本人生徒と同じ価値規範を身に付けることがニューカマー児童生徒にとって学校生活に適應するための唯一の手段となっていることが指摘された。しかし、マリオの場合は自分が日本人生徒とは異なる価値規範を持ったニューカマー生徒だという意識を持って学校生活に適應している。そしてこのような意識のおかげで、マリオは進学先の高校の学校差や学業成績などといった、同じ高校の日本人生徒の重視する価値規範に流されることなく、大学進学という進路を選択している。

以上、マリオのようなニューカマー生徒が日本国内に存在しているという現実、ニューカマー生徒の一部が複数の国家や国籍に基づく価値規範や人脈を巧みに利用しながら、居住国や母国など特定の国家の価値規範に捉われずに進路を形成していることを指し示している。グローバル化が経済的領域だけに留まらず政治的領域や日常生活を含む文化的領域にも広がっていることが指摘され、かつグローバルな視点の下で求められる価値規範が普遍的ではなく状況によって異なることも強調されるようになってきた現在(馬淵 2002)、マリオをはじめとするニューカマー生徒の一部はまさに「グローバルな進路形成」を行っているのである。具体的に彼らは日本の学校生活

や日本国内のエスニックコミュニティに基づく価値規範や人脈だけではなく、様々な国家や国籍に基づく価値規範や人脈も自分の進路を決定していく上で重視する。そして自分自身の将来目標達成に近づくことのできる最もよい機会を提供してくれる場所や集団を世界規模で見つけようとしている。

以上の知見を踏まえ、「グローバルな進路形成」に関する二つの課題を提示したい。一つは、教育実践上の課題である。生徒が特定の国家や集団に基づく価値規範に縛られずに世界規模で進路を形成していくことの重要性は、近年、日本国内の中華学校でも意識されつつあるが（黄 2005）⁽⁵⁾、今後は一般的な日本の学校でも生徒の一部が複数の国家や国籍に跨る価値規範や人脈を所有して進路を形成していることを認識する必要がある。それはニューカマー生徒の事例に限らず、日本人生徒の場合でも同様である。国際移動が進む現在、国境を越えてグローバルに自分の進路を考えていくことはもはや特別ではないことを、教育現場ではまず意識することが求められている。

二つ目は、学術研究上の課題である。国際移動の活発化に伴い「グローバルな進路形成」を行う生徒が日本国内で出現しつつある現在、今後の日本の学校教育に関する研究では、まず、教育現場が「グローバルな進路形成」という現実をどのように受け止めているのかを検証することが求められている。そして教育現場の抱える様々な課題を明らかにした後に、生徒の進路形成をグローバルな基準で見えていくための具体的な方策を検討していく必要がある。特にニューカマー児童生徒の場合、彼らの多くは複数の国家間を不定期に移動する可能性が高いことから、特定の国内の枠組みに囚われずにグローバルに進路を形成していくことが予期される。それゆえ今後のニューカマー児童生徒教育に関する研究では、生徒がグローバルな視点で進路を形成することが予想されるので、そうした進路形成のサポートの為の方策を検討することが求められている。

【註】

- (1) 近年ではGoodsonの定義を再検討して、ライフヒストリーの意義を新たに見出す動きが見られるが（鶴田・小宮 2007）、ここでは従来の枠組みの下で、ライフヒストリーを作成する。
- (2) O市は2001年より開催されている外国人集住都市会議にはじめから参加している。ニューカマー生徒の教育についても、1996年よりO市外国人児童生徒適応指導教室運営協議会を設立している。
- (3) A高校の進路実績は、4年制大学14.9%、短期大学3.3%、専門学校29.5%、就職49.0%となっている。
- (4) 荻谷（2001）の調査では、日本人高校生の学習時間の平均は全体で1.9時間（1997年調査）となっており、マリオの受験時の勉強時間はこの平均時間をやや下回る。
- (5) 黄（2005）は、横浜の中華学校のバイリンガル教育が民族の繋がりよりもむしろ国際的に有用な資格や社会的地位を獲得する為の手段として実施されている現状を報告する。そして民族教育の実施というそれまでの中華学校の役割が、中国文化に愛着を持つ国際人の養成という役割に変化しつつあることを指摘する。

【文献・資料】

- Goodson, I.F, 1988, *The Making of Curriculum*, Falmer Press
- 広崎純子, 2007, 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択－支援活動の取り組みを通じての変容過程」『教育社会学研究』第80集, pp.227－245.
- 池上重弘, 2001, 『ブラジル人と国際化する地域社会－居住・教育・医療』明石書店
- イシカワ エウニセ アケミ, 2005, 「4章 家族は子どもの教育にどうかかわるか－出稼ぎ型ライフスタイルと親の悩み」宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育－不就学問題と多文化共生の課題－』東京大学出版会, pp.77－95.
- 門脇厚司・陣内靖彦編, 1992, 『高校教育の社会学－教育を蝕む〈見えざるメカニズム〉の解明－』東信堂
- 鍛冶致, 2007, 「中国出身生徒の進路規定要因－大阪の中国帰国生徒を中心に－」『教育社会学研究』第80集, pp.331－349.
- 蒔谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社
- 川又俊則, 1999, 「ライフヒストリーの資料論」『上智大学社会学論集』22－23号, 上智大学社会学科, pp.103－119.
- 城所章子・酒井朗, 2006, 「夜間定時制高校の自己の再定義課程に関する質的研究－「編成資源」を手がかりに－」教育社会学研究第78集, pp.213－233.
- 児島明, 2001, 「「創造的適応」の可能性とジレンマ－日系ブラジル人が生きる学校世界－」志水宏吉・清水陸美編『ニューカマーと教育－学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって－』, pp.116－122.
- 馬淵仁, 2002, 『「異文化理解」のディスコース－文化本質主義の落とし穴－』京都大学学術出版会
- 宮島喬, 2002, 「就学とその挫折における文化資本と動機づけの問題」宮島喬・加納弘勝編『国際社会2 変容する日本社会と文化』東京大学出版会, pp.119－144.
- 黄丹青, 2005, 「日本における中華学校のバイリンガル教育実践に関する一考察－横浜山手中華学校を事例として」『国立教育政策研究所紀要』134, pp.143－154.
- 志水宏吉, 2001, 「学校文化とニューカマーの子どもたち」志水宏吉・清水陸美編『ニューカマーと教育－学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって－』明石書店, pp.74－76.
- 志水宏吉・中島智子・新保真紀子・今井貴代子・石川朝子・棚田洋平・山本晃輔, 2006, 「高校を生きるニューカマー－「自己の物語」に見られる資源と戦略－」日本教育社会学会第58回大会配布資料 (2006年9月22日 大阪教育大学)
- Trow, M. マーティン・トロウ, 1976, 天野郁夫・喜多村和之編訳『高学歴社会の大学－エリートからマスへ』東京大学出版会
- 鶴田幸恵・小宮友根, 2007, 「人びとの人生を記述する－「相互行為としてのインタビュー」について－」『ソシオロジ』第52巻1号, 社会学研究会, pp.21－36.
- Wallman, S, 1984, *Eight London Households*, London, Tavistock (= 福井正子訳, 1996, 『家庭の3つの資源』河出書房新社)
- 山崎香織, 2005, 「新来外国人生徒と進路指導－「加熱」と「冷却」の機能に注目して－」『異文化

問教育』21号, pp.5-18.

山崎香織, 2006, 「ニューカマー高校生の進路意識に関する一考察 - 「準拠集団」に注目して -」

『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』名古屋大学大学院教育発達科学研究科, 第52巻
第2号, pp.57-67.

外国人集住都市会議, 2004, 『外国人集住都市会議in豊田 報告書』(2004年10月29日)

外務省, 2007, 「諸外国の学校情報 (2007年3月)」外務省ホームページ

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/04latinamerica/infoC42700.htm)

Life History of a Brazilian Senior High School Student: Toward the Study on Career Development in a Global Society

Kaori YAMAZAKI* and Kojiro IMAZU**

The number of newcomer students from Brazil and Peru who go on to high school has been increasing for over the last decade especially in the residential areas for many newcomers. Research has focused on newcomer elementary and junior high school students since the 1990s, but not senior high school students. One of the most important issues of newcomer students is their career development such as entering universities and finding employment.

This paper applies the life history method in analyzing a life history of Mario, who is a newcomer Brazilian college student who graduated from a public high school in Japan. He came to Japan in April 2000 and enrolled in a junior high school as a third grader. After graduating from junior high school, he passed the special exam for foreign students to enter senior high school.

His career development can be classified in four stages as follows:

(1) Before coming to Japan: Mario's Japanese Brazilian father gave him advice that studying in and out of the school was important in order to be a leader in a Brazilian society. Going to college seemed very natural for Mario, and he also learned Japanese for four months at the language school in Brazil.

(2) Junior high school student: Few foreign students attended Mario's junior high school, and Mario spent time at school only with Japanese friends. Although he struggled with the differences of school culture between Brazil and Japan, he eventually got over the difficulties through support from teachers and classmates.

(3) Senior high school student: Although there were some newcomer students in his senior high school, Mario spent his time with Japanese friends instead of newcomers. Accepting advice from teachers and his family, Mario decided to take an entrance examination to enter university and did not join a group for students who were planning to seek employment after graduating from high school. He studied hard for six months to prepare for the entrance exam.

(4) University student: He was accepted to a private university, where he has been treated no differently than Japanese students, which means he has to take all of the same required credits. Mario is planning to go to a graduate school in the US or Australia to study International Studies in order to pursue a future career at the United Nations. He has been gathering information on

* Graduate Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

** Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

graduate schools and their admission processes. He is looking at pursuing an international career.

Mario's case is different from other newcomer students' careers that researchers have studied. He is more determined to pursue his education than make money. As this study shows, he is looking to expand his career globally. Globalization can be observed in the movement of careers not only for foreign students, but also Japanese, and career development in this era of globalization requires further study in the future.